

+1 (プラスワン)



「オンリーワン?」

牧師 横山順一

鳥取大学を卒業した一九八五年春、しかし同志社大学編入試験に失敗し、友人のついでで西宮に出て来た。

そして西宮YMCA夙川プラントで、当時まだあった予備校数学講師の職を与えられた。

同じく講師を務めていたTさんと、ほどなく親しくなった。出来の悪い私と違って、賢く、穏やかなTさんと馬が合ったのは不思議だった。

私たちは、夜の授業が終わると、夙川沿いに歩き、屋台で一杯やるのが常だった。とりとめのない話に癒された。

秋の頃だったか、彼のお父さんが召されると聞いた。葬儀に出かけると、ごじんまりとしたお寺に、わずかな遺族がいるだけで、外部の参列者は私だけだった。

そこは被差別部落専門のお寺と聞いた。「別に来んでええよ」と言ったTさんの寂しい思いを初めて知った。

誰が行かなくなつて、たとえ一人だつて動くぞ。そのために牧師になるのだ、とその時こころした。

時を経て、思いがけず教団・開拓伝道協議会の実行委員長に選ばれた。勝手に「開拓」されるのは嫌だと訴えた参加者がいた。

「開拓」は、一部には聞こえの良い言葉だが、実は負の歴史を負う問題の言葉だった。アメリカの西部「開拓」にしろ、満蒙「開拓」にしろ、土着の人々を追い出し、一方的な開拓をなして、その傲慢さに気づかなかつた例に満ちている。

彼女は私に尋ねた。「一人でもやってくれる?」

誰が行かなくなつて、たとえ一人だつて動くぞと誓つたのを思い出した。それで「開拓」伝道の名称変更に取り組む二年間を過ごすことになった。

「開拓」という言葉が背後に持つ欺瞞性が明らかになれば、きつと誰でも分かつてもらえると気楽に考えていたが、そうは問屋がおろさなかつた。

「開拓」に愛着を抱き、それな

りに長い歴史を過ごして来た人には、こだわりがあり、単に名称を変えれば済む問題ではなかつたのだ。

それが実行委員長を二年続けてやる異例の事態を招き、更にはもう一年、委員の一人として協議会に関わらざるを得ないはめになつた。それが昨年のことである。

名称変更はなつた。「みんなの伝道協議会」。少し稚拙な印象であるが、教師も信徒も、日本人も外国人も立場を同じゅうして、皆で課題を考える協議会へと、思いが込められた結果だった。

本当は、途中で放り出したくなつた。余りにも種々の意見が続出して、一向に展望が開けない時期があつた。

ええ加減な私が、それでも逃げず取り組めたのは、「一人でも動くぞ」と決めた誓いであつた。

我ながらそれは大切な決意だつたと思う。けれども、一人ではできなかつた。一人でもやるべきこととはある。しかし、一人ではなく、みんなで作る方が良い。そのような友と輪を作り上げる努力、それがもつと大切だと学んだ。